パキスタン北部山岳地帯の妖怪

子島　進

はじめに

パキスタンは，インドとイランに挟まれ，南アジアと西アジアの文化が交差する場所に位置している。また南北の軸で見ると，チベットから流れ出すインダス川は，中国とインドを経てパキスタンに達する。そして，北の山岳地帯から丘陵部を経て南の大平原部を縦断し，やがてアラビア海に流れ込む。このように，パキスタンは地理的にも文化的にも「クロスロード」に位置しており，そのことは各地域の民族文化にも反映されている。

本論文で取り上げるのは，アフガニスタン，中国，インドと国境を接する同国最北部の山岳地帯であり，異種混交的なパキスタンの中でも，ひときわユニークな言語・民族構成を示している。そこでは，世界第二の高峰であるK2（8611メートル），ナンガー・パルバット（8126メートル），ラカポシ（7788メートル）といった名だたる山々が聳え立ち，これらの山々に囲まれた無数の谷に分かれる形で，さまざまな言語・民族集団が暮らしているのである。「谷ごとに言語が変わる」と言われるほど，多くの言語が話されている。この地方特有の言語としては，ダルド系のシナー語やコワール語，それに系統不明のブルーシャスキー語などが挙げられる。また宗教は基本的にはイスラームであるが，シーア派系統の宗派が多い点が特徴となっている。シーア派主流である十二イマーム派に加えてイスマーイール派やヌール・バフシ派といった少数派も存在する。

主としてコワール語話者の村でおこなったフィールドワークの際には，上記の地理的環境のもとで育まれた「超自然的な存在についての語り」を多く記録することができた。それは，山の頂上に宮殿を構える妖精（pari）から，池の底に潜む怪魚（nahang）まで実に多様であり，先行研究においても，興味深い記述が残されている（Hussam-ul-Mulk 1974, Lorimer 1929, Müller-Stellrecht 1973, ショーンバーグ 1976）。これらの存在の語りに焦点を当てて，記述と分析を進めていきたい[1]。

1．谷に住む人々の暮らし

まず，パキスタン北部山岳地帯における生活様式について，少し体系的に見て行きたい（より包括的な説明に関しては，Herbers and Stöber 1995, Langendijk 1991を参照のこと）。主要な生業は，農業と牧畜を有機的に組み合わせた農牧複合の形態をとる。定住村（写真1，2）では小麦を中心に，トウモロコシ，大麦，雑穀類を栽培している。標高の低い地方では二毛作も行う。庭先ではトマト，大根，玉ねぎなどの野菜を作っている。夏になると，村から離れた枝谷の上流に小屋を構え，ヤギ，羊，牛の放牧に従事し，乳製品の生産に力を入れている。ヤクは，ほぼ年間を通じて放し飼いにされている。秋になり，作物の収穫作業が終わると，家畜は村へ降ろされ，刈取がすんだばかりの畑に放される。冬の間は舎飼い中心であるが，ヤギは斜面での日帰り放牧を行う。穀物の殻や藁が家畜の飼料として利用される一方，その糞が畑の生産力を高める肥料となる。今日，道路の改良に伴って，トラクターの普及には目覚まし

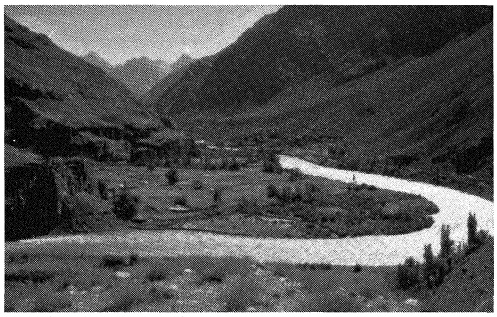

写真１　ギズル川流域の村の様子（夏）

写真２　ギズル川流域の村の様子（冬）

いものがある。しかし，狭い傾斜地を利用した畑も多く，牛による犂耕や脱穀も続いている。

主食として食べているのが，小麦やトウモロコシで作る各種のパンである。米は作っていないが，バザールで買ってきて，折りにつけ食べる。基本的にはカレー料理の範疇に入るものだが，スパイスの使用はごく控えめである。夏には，バターをはじめとする各種乳製品が食卓を賑やかなものとする。家の周りにはさまざまな果樹が植えられている。桑，アンズ，桃，ブドウ，クルミ，リンゴなどである。ギルギットとシャーンドゥール峠の間を流れるギズル川の流域では，植民地時代にイギリス人が放流した鱒が支配種となった。夏の間，人々は鱒釣りを盛んに行う。

肉は腐りやすいので，結婚や出産などのお祝いでもなければ，家畜をつぶすことはまれである。せいぜい鶏をひねる程度である。12月になると，ヤクや牛などの大型家畜を屠り，冬の間

写真３　ヤクの屠殺

にゆっくりと消費する習慣がある（写真３）。

２．村人との会話ーフィールドノートから

文化人類学（民族学）を専門とする私は，この地域の民族や宗教のありように魅了されてきた。1984年以来，二回の長期調査を含めて，さまざまな民族が暮らすこの山岳地帯を度々訪れてきた。先に述べたように，「谷ごとに言語が変わる」と言われるほど，多くの言語が話されている。特に，ダルド系のシナー語やコワール語，それに系統不明のブルーシャスキー語などをこの山岳地域に特有の言語として挙げることができる。また宗教は基本的にはイスラームであるが，シーア派系統の宗派が多い点が特徴となっている。シーア派主流である十二イマーム派に加えてイスマーイール派やヌール・バフシ派といった少数派も存在する（イスマーイール派については子島2002，ヌール・バフシ派については子島2008a をそれぞれ参照のこと）。

調査を行ったギズル川上流のピンガル村周辺では，言語は主としてコワール語であった。このコワール語を少しずつ習得するにつれ，実にさまざまな「目に見えないもの」が存在することがわかるようになった。とりわけ，1993年から95年にかけてのフィールドワークにおいては，調査地でさまざまな妖怪や妖精についての話を聞くことができた。まずは，当時の会話記録から抜粋して，村の生活の雰囲気をなるべく伝えるように心がけてみたい（このときのより

詳しい記録として子島1994a，1994b，1995a，1995b)。

今夜もまた，ホストのムハンマッディーンと塩茶を飲みながらくつろいでいる（塩茶というのは，この地方特有の飲み物で，塩を入れて飲むミルクティー。最初は奇妙な味だが，慣れてくると不思議なことに，これなしではすまなくなる)。話題の中心は，*History of Northern Areas of Pakistan*（Dani 1989）という英語の学術書である。私が町で買って来たこの本には，古代から現代にいたる50枚近い写真が収められている。

「これは何だい？」
「カールガー谷の磨崖仏だよ」
「これは？」
「フンザ谷のバルティット城」
こんな調子で一枚ずつ見ていく。
「これは？」
ムハンマッディーンが一種のストーン・サークルを指して聞く。
「多分，古代の王様の墓だよ。ここに書いてあるよ。ヤスィーン谷のマニチ村に住む，イスハークさんの家の庭に残っている」
「おいおい，イスハークと言えば，うちの親戚じゃないか。もう死んじまったがね。なんだ，よく見たらこれはブーティじゃないか」
「ブーティ？」
「夜，マニチ村のブーティに行くと，ジン（jinn. 妖怪）が騒ぐのが聞こえるのさ」
「へえ！」
「それにしても，ブーティは墓じゃないだろう。昔，中国から軍隊が攻めて来たとき，彼らが残していった記念碑だ。そういう話だ」
「でも，この本の著者のダーニー博士は墓だと推定している」
「イスハークの家の近くに，もう一つブーティがあったんだよ。それを土地の所有者が開墾のために掘り返したんだが，何も出なかった。墓なら何かがでるはずだろう？」
「…」
「ここのも，きっと何も埋まっていないだろうな」
「えっ，ピンガルにもブーティが？」
「ああ，対岸にあるよ。明日見に行ったらどうだい」

翌日の昼過ぎ，ブーティを探しに行く。歩いていると，子供たちが寄ってくる。
「どこ行くの？」
「ブーティ」
「どうして？　どうして？」
「写真を撮るんだよ」
「僕も写してよ」
「僕のも」
「わかったからさ，道案内してくれよ」

ブーティは村の端，ニカツォールと呼ばれる場所にあった。岩だらけの斜面と川に挟まれた狭い土地に，大小五つもある。ほぼ中央に位置するものが一番大きく，直径10メートルはあるだろうか。高さや幅が１メートル前後の大きな自然石が40ほども連なり，円を形作っている。さらにその上にも，いくつも大きな石が載せてある。これを人力で移動するのは大変だろう。

ブーティの内部は，大小何十もの石で埋まっている。しかし，これは後から無造作に放り投げた感じがしないでもない。この大ブーティの周囲の四つは，石も小さく，直径５メートル程度である。これらがもし墓だとすれば，中央が高位の主人だろう。そして周りにあるのが，それに寄り添う家族，あるいは家臣といったところだろう。
「ブーティはこれで全部かな？」
子供の一人に尋ねる。
「うん，それと，あの岩は昔，力持ちの大男が運んできたんだ」
少し離れたところに，人の背丈ほどの岩がある。それを大男が山から運んできたと言うの

だ。
「何のために？」
「知らない」
「昔って，いつ頃の話かな？」
「大昔さ。アングレーズ（イギリス人）の時代」
イギリス人の植民地支配は1947年まで続いたから，この答えには苦笑してしまったが，後で大人に聞いてみても，大男とブーティの関係ははっきりしない。

以上は，ピンガル村でのやりとりである。この村をベースに周辺の村にもよく出かけたのだが，次は，ピンガルから10キロほど上流のチャーシ村での話である。

「近所で男の子が生まれたんだ。肉をごちそうになりに行こう」
昼過ぎ，ワファー・ジャーンが誘いに来る。朝から銃を打ち鳴らしているので何事かと思っていたが，あれは祝砲だったのだ。ムハンマド・ファールークと名付けられた赤ん坊はベッドの上で静かに寝ている。訪れた人々はその寝顔をのぞきこみ，お祝いの言葉を家族に送る。彼らに対して，小麦のおかゆと牛肉が振舞われる。
　ごちそうですっかり体が暖まり，お礼を言って外に出ると，墓らしきものが目に留まる。
「あれは何だい？」
「ブズルグのズィヤーラットだよ」
ブズルグ（buzrug）とは，この場合，宗教的に尊敬されている人物，ズィヤーラット（ziyarat）は聖なる場所である。聖者に関わる場所のようだ。
「昔々，ピンガルとシャマランの間にはゴール（gor）が住んでいて，道行く人をつかまえては食べていた。この聖者は，そのゴールを岩の中に封じ込めた。ピンガルの外れにその場所はあるから，一度見に行くといい」

　ズィヤーラットは，おおよそ次のような形をしている。大きな石が並べられて，４メートル×６メートルの楕円形を形作っている。その上にはきれいな縞模様の入った石が積まれ，数か所に色とりどりの小旗が挿してある。その中央にある石の大きさは，長さ１メートル，幅40センチ，高さ50センチほどである（写真４）。
「これはその聖者の墓なのかい？」
形状から推察して質問する。
「いや，これは墓じゃない。聖者は，ある日突然，ここから姿を消したんだそうだ。そして，後にはこの石が残っていた」
「つまり，これは村人が作ったものではない」
「とんでもない！」

　その晩，世話になっているシャーヒーン・ハーンの部屋にワファー・ジャーンと彼の父親のアディナ・シャーがやって来る。一緒に夕食を食べた後，塩茶を飲みながら話を聞く。
「あの聖者の名前は？　もちろんイスマーイール派なんだろう？」
「あのズィヤーラットはとても古いものなんだ。名前もわからないし，宗派もはっきりしない」
「ただし，スンナ派の連中は，石を拝んでもどうなるもんでもないという態度だ。しかしイスマーイール派にとっては大切な場所だ。

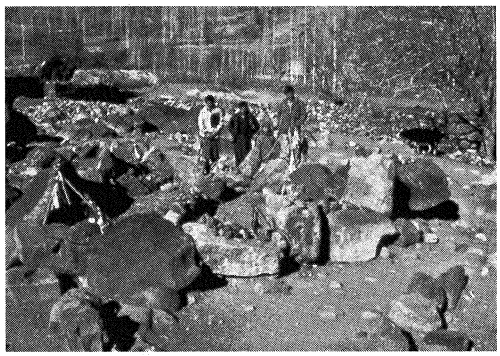
写真４　チャーシ村のズィヤーラット

とくに女性はローティー（パン）を供え，いろいろな願い事をするんだ」
「ひどいのはターンギール谷の連中で，ここからパンダル村に向かう丘の途中にあるもう一つのズィヤーラットを台無しにしてしまった。縞模様の入ったきれいな石をごっそり持ちだして，どこかへ捨てたんだ[2]」
「それはまた別の聖者のズィヤーラットなのかい？」
「同じ人物だよな」
「いや，二人は兄弟だと聞いているけど…」
　このあたりは少し話が分かれる。定説はなさそうだ。
「ところで，この地方のズィヤーラットで一番有名なものはどこにある？」
「そりゃダヒマル村のものだよ（写真５）。子供が欲しいときにお願いに行くんだ。幼い家畜を一頭選び，お供え用に育てる。その家畜が大きくなったら，ズィヤーラットへ連れて行き，そこで屠るのさ」
そんな話をひとしきりした後で，シャーヒーン・ハーンがぽつりと付け加える。
「でも，聖者に関する話は昔からそう言い伝えられているだけで，本当のところはよくわからないな」
　若くして小学校の教師を務めるシャーヒーン・ハーンだが，少し自信がなさそうである。

　パンダルからピンガルへの帰路，ピール・サーヒブを訪れ，ズィヤーラットについて聞いてみる。
「聖者は，その昔のイスマーイール派の布教者かもしれませんね？」
「フム，まあ村人は何と言っているか知らんがね。チャーシ村にそんなものがあったのか」
歩いて行ける隣村のことであり，当然知っているはずだが「そんなものがあったのか」と言われては，こちらも話を続けられない。地元の宗派の長老として，また多くの宗教書を読破した知識人として，この話題には触れて欲しくないようだ。普段はいろいろと教えてくれるピール・サーヒブがむっつりしているので，この日は早々にお暇してピンガルへの道を急いだ。

写真５　ダヒマル村のズィヤーラット

　ピンガル村に戻って，チャーシ村で聞いたゴールなるものの場所を確かめに行ったときのやりとりを続ける。同行してくれたのは友人のスルターン・ラフマットである。

「そりゃ，ゴール・ワウ・パップ（gor waw pap）のことだね」
歩きながら，彼は説明してくれる。コワール語で，ゴールは超自然的で邪悪な存在，ワウは年老いた女性，パップは乳房を意味する。その昔，ピンガル村とチャーシ村の往来は，このゴール・ワウによって妨げられていた。あえて通ろうとする者は，必ず食われてしまっていた。村人は困り果てていたが，ある日突然やって来た聖者が，その宗教的な力でゴール・ワウを岩の中に封じ込めてくれた。岩の隙間から片方の乳房だけがはみ出しているので，その場所はゴール・ワウ・パップと呼び慣わされている。
　人食い山姥（もしくは鬼婆）の乳房－日本語に訳すとこんな感じになるのだろうが，その語感にたじろぎながらも，私の期待は高まり，カメラを持つ手に力が入る。

「これだよ」
ジープ道路を10分ほど歩いたところで，スルターン・ラフマットが急に立ち止まって指さす。
「えっ，どこ？」
私はあわててそちらを見るが，何もない（としか思えない）。
「これだよ」
スルターン・ラフマットは，今度は道端の小石を放り投げる。カチッ。小さな音をたてて，人間の頭ほどの小隆起に小石はぶつかる（写真６）。
「はあ，これかあ」
多少は人間による造形物を期待していただけに，何の変哲もない岩の壁面を前に，私は正直がっかりする。しかし，友人の次の発言は意外だった。
「そして，あれがゴール・バップ（gor bap）だ」
バップは，年老いた男性の意である。今度は対岸の方を向いて，スルターン・ラフマットは言う。
「ゴール・バップもやっぱりブズルグに封じ込められたんだ。見ろよ。対岸のあの切り立った大岩の中だ」

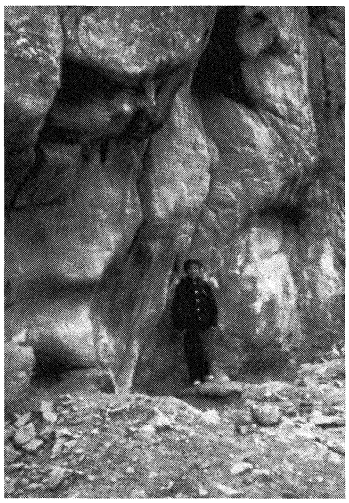
写真６　ゴール・ワウ・パップ

その後，妖精（pari）についての話を聞くこともできた[3]。高峰の頂に城を構える妖精は，そこから周囲を見て回るので，枝谷（支流）の上流部に分け入ったとき，妖精に出会う人もいる。ピンガル村の古老ムハンマド・ワリー・シャーは，ヨジャ・ガー谷の奥で彼らの演奏を聞いている。

真夜中一人だった。下から楽器を奏でてきた。どんどんこちらに来て，アーダムの家のあたり（ピンガルの小高い丘の上に，集落から離れて位置する。当時はなかった），あそこで30分ほど演奏した。20～30人で，男も女もいた。そして上流に去った。夜中で姿は見えない。声でわかった。楽器は人間の楽士たちと同じものを使っていた。

パイクシ村の長老，アーリム・ハーンは次のように述べている。

ホトルティ・ゴル谷では夜になると「ディルガウ，ディルガウ」という声を妖精が発しているのが聞こえてくる。

先祖のマナールの兄弟，ニヨールは狩りの名人だった。二頭のアイベックス（tonush）を仕留め，担いでいた。その途中，ニヨールは妖精に会い，意識を失った。彼には子孫ができなかった。

この話の意味するところは，自分の家畜（所有物）であるアイベックスを，いっぺんに二頭も仕留めたニヨールに怒った妖精が，彼に子孫の繁栄を許さなかったということであろう（写真７）。

妖精は自然の営み，とりわけ豊穣性に関わっているとされる。そしてまた，豊作の祭りを司る土地の支配者－ mehtar，mir，raja などの称号で知られる－との結びつきが，直接かつ強いものであることが指摘されている。まず，ア

写真７　狩りで仕留めたアイベックスの角と猟師

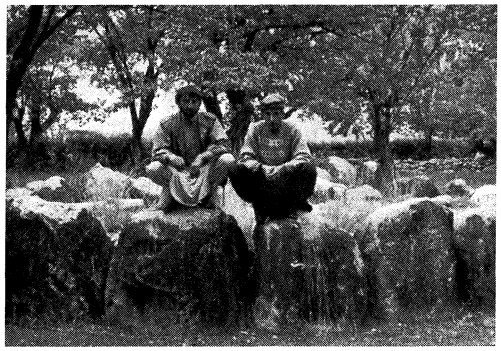

写真８　マニチ村の「デューの飼い葉おけ」

ズール・ジャムシェッドはこの地域の最初のムスリム王とされる一方で，妖精を母に巨人を父に持っていたとされる（Müller-Stellrecht 1973：162）。また，チトラールの「モートラーム・シャー一世は，ティリチ・ミール峰の頂に住む妖精の女王の娘とほんとうに結婚した」（ショーンバーグ1976：243）。さらに1922年，ヤスィーンのラージャー，シファット・バハードゥルは妖精と結婚したとの報告がある（Lorimer 1929：521）。

３．ゴール，デュー，ナハング

以上から，フィールドワークの様子がうかがえるかと思う。（少なくとも私の目には）見えない不思議な存在についての話を聞くのは，今思い返してみると，フィールドワークの中でも，刺激に富んだ体験であった。妖怪は，私の調査のメインテーマではなかったのだが，その後も，あちこちで話を聞く機会に恵まれた。それだけ，この地域の文化に深く根ざしているということだろう。

その後わかったことの一つに，ストーン・サークルがある。ピンガルで最初に「ブーティ」という言葉に接したときは，結局その意味も今一つよくわからなかった。しかし，ヤスィーン谷を訪れたとき，やはりこの種のストーン・サークルが存在し，「デューの飼い葉おけ」（dew-o-akhr）として広く知られていることを確認することができた（写真８）。このデューも，先に登場したゴールのように人を食う怪物なのだが，ヤスィーン谷では「電光石火のミルザー」として親しまれている。親しまれているというのは，このミルザーと呼ばれるデューも聖者に退治されたのだが，聖者が封印しないで召使としたからである。常人にはデューの姿は見えないが，聖者にはデューを見通す能力が備わっていた[4]。聖者に言いつけられると，ミルザーは畑仕事でも遠くへの買い物でも，あっという間に片づけた。そこから電光石火と呼ばれるようになるのだが，聖者の召使になりながらも，ときどき悪態をついたというのがデューらしいところである。遠来の客が乗ってきた馬を一晩中乗り回したり，食事が足りないと皿をガタガタ鳴らして不満を表明したりしたとのことである。

パンダル村には，「ナハングの湖」（nahang chat）がある。水面が妖しく色を変えるこの湖では，今までに三人がナハングに引き込まれ，溺れ死んだそうである。このナハングを，パキスタンの国語であるウルドゥー語の辞書で引くと「ワニ」である。しかし，この山地の人々の言うナハングは，私たちの知るワニそのものではないようである。さらに，ゴールにせよ，デューにせよ，ナハングにせよ，村人は明確に分類しているわけではなく，想像する姿も人によっては異なっている。例を挙げてみよう。ピンガル村の青年が，あるとき牛の番で村のすぐ上の丘にいた。夜の十一時ごろだが，村を見下

ろすと，デューが口から火を吐いているのが見えたそうである。それは黒い犬（のようなもの）で，次の瞬間には上流の集落へ飛び移っていた。瞬間的な移動に共通点が感じられるが，馬を乗り回すというミルザーのイメージとは異なる部分もまた大きいようである。またピンガルの別の少年は枝谷上流の池で，ナハングが岩の上に寝そべっていたのに気付いた。このときお互いにびっくりして，少年は小屋へ，ナハングは池へ飛び込んだという。人を水中に引きずり込むと聞けば，いかにも恐ろしいが，「岩の上でお昼寝」と聞くと，やけにのんびりした感じとなる。ヤスィーン谷では，人によってはストーン・サークルを「ナハングの飼い葉おけ」と呼んでいた。この場合のナハングは，もはや水中に暮らすものとは見なされていないのだろう。

4．イスラームと妖怪の関係

ここまでの記述から「しかし，この人たちはムスリム（イスラーム教徒）ではないのか？このような世界観とイスラームの教えは両立しないのではないか？」という疑問が生じてくるかもしれない。たしかにイスラームは，厳格な一神教として知られており，この地域に暮らす人々は，宗派こそさまざまだが，唯一絶対の神を信じるムスリムである。

では，厳格な一神教としての体系をもつイスラームと，これらの妖怪や妖精はどのような関係にあると考えればいいのだろうか。まず，聖典クルアーンにも「ジン」と呼ばれる超自然的存在が登場することを確認しておきたい。実際，フィールドノートを見ると，この地域の人々自身が，コワール語のゴールやデューを，ときおりアラビア語のジンへと言い換えていることがわかる[5]。地域に根ざした超自然的存在に，「ある程度」のクルアーン的な裏付けを与えることは可能だろう。また，イスラームという宗教は，それぞれの地域文化と多様で柔軟な関係を持ちえたからこそ，世界宗教になったのであろう。しかし，ここで見てきたような語りが，パキスタン北部に暮らすさまざまな価値観あるいは立場の人々（そのほとんどがムスリム）に，まったく問題なく受け入れられているとすることもできない。そのことは，ターンギール谷の人々の乱暴や，イスマーイール派の長老による話題の回避といった行為から見てとることができる。

ここで，聖者（ブズルグ）に注目することで，妖怪や妖精についての語りが，どのような形でイスラームの文脈に埋め込まれているのか，あるいは接点を持っているのかを検討してみたい。すでに紹介したように，ピンガル村とチャーシ村の間を通ろうとする村人は，山姥（gor waw）に食われていた。困っていた村人を助けてくれたのが，ある日突然やって来た聖者である。その宗教的な力で山姥を岩の中に封じ込めたのである。

聖者が土地の妖怪を退治するという話は，ギズル谷の北東に位置するフンザ谷の上流部でも記録されている（Müller-Stellrecht 1973：237, 8）。こちらは名前もわかっていて，バーバー・グーンディと言う。この聖者のズィヤーラットはチャプールサーン村にある。この地方では，かつて池に棲む竜（九つの頭を持つという説がある）に苦しめられていた。毎日，一人の村人が竜のお供えに差し出され，食われていた。お供えを出さないと，怒った竜は巻き起こした大嵐で村を破滅させてしまうので，村人にはどうしようもなかった。ある日，自分の番となった一人の少女が，バーバー・グーンディに助けを求めたところ，手に槍を持った馬上の人物が現れた。そして，娘の代わりに池へと向かい，槍で竜を退治するのである。

ここでの聖者はイスラームを体現する存在となっているが，彼が発揮するのは奇跡的，超人的な力である。都市におけるイスラームの守護者を，ウラマー（字義通りには知識を持つ人。すなわち宗教学者）であるとする考え方に対して，ずいぶんと異なっている。イスラーム文明

を花開かせた大都市では，イスラーム学に専念する学者を再生産することが可能だった。しかし，険しい谷の小村で暮らす人々にとって，それは久しく縁のない世界であった。そんな彼らが暮らす地方にまでイスラームは広がって行ったのだが，それを可能としたのは聖者のような存在だったのであろう。実在したイスマーイール派の布教者に，ナーシル・ホスローがいる。十一世紀の人物で，思想家，詩人，散文家，旅行記作家として高名である。パキスタンの最北部においては，この地に最初にイスマーイール派の教えを広めた人物として知られている（Hunzai1991，子島2003，Nejima2006）。村のレベルで知られるナーシル・ホスローは，しかしその思想よりも，奇跡譚によって知られる聖者という方が適切である。たとえば，こんな言い伝えがある。村の近くの砦にナーシル・ホスローが住んでいたときは収穫が豊かで，家畜も多産だった。しかし彼が立ち去ってしまうと，村は病気や不作に襲われる（ショーンバーグ1976：88，96）。これは，ナーシル・ホスローに豊作をもたらす力が備わっていたと，村人たちが考えていることを示している。実はこのような伝承は，パキスタンの最北部に限られたものではない。2007年，はるかに離れたインド洋に浮かぶモルディブで調査したときにも，聖者が海の怪物を退け，生贄の少女を救う話を聞くこととなった（NgCheong-Lum 2000：19，20. 子島2008b も参照のこと）。イスラームの聖者による妖怪退治は，地域におけるイスラームの導入とその優越性を示す逸話として，大きな広がりを持つものだと言えそうである。興味深いのは，イスラームを語ることが，それぞれの地域の妖怪を語ることにつながっている点である。聖者とリンクすることで，一概に「非イスラーム的だ」と排除されるのではなく，むしろ繰り返し語られる「地域へのイスラームの導入」という話題の中で命脈を保ち続ける。妖精の場合には，ムスリムの王権と接続する。そのような形で，ゴールやデュー，そして妖精も，パキスタン最北部に暮らすムスリムの間で語り継がれてきたのだろう。

＜注＞

(1) 本稿執筆の契機となったのは，「妖怪学講義」を東洋大学の全学科目として担当する菊地章太教授からのお誘いである。日本語の語感で言えば，まさに妖怪に当たるテーマを取り扱う本稿は，同講義で学生に向けて話した内容を，加筆修正したものである。

(2) ギズル谷の流域では，隣のターンギール谷の住民は無法者として知られている（子島 2000）。

(3) より詳しくは，（子島 2000）を参照のこと。

(4)ヤスィーン谷はマニチ村にある「デューの飼い葉おけ」を訪れたときのことである。民家の庭にある飼い葉おけの写真を私が撮ろうとすると，主人が声をかけてきた。「おい，デューが見えないか？　以前あんたみたいな外国人が写真を撮ろうとしてやってきた。だけどカメラを覗いたらデューが見えたんで，青ざめて逃げ出したぞ」。残念ながら，私にはデューは見えなかった。しかし，私には聖者のようにこの妖怪を制御する力はないので，見えなくて幸いだったのだろう。

(5) イランの民話や伝説における，アラビア語起源のジンと，ペルシア語起源のパリーの使い分けについては，（竹原 2010）を参照のこと。同論文では，こぶのある男が，ジンやパリーの結婚式で踊り，そのお礼にこぶをとってもらうという民話を紹介している。

＜引用文献＞

Dani, A. H.
1989 *History of Northern Areas of Pakistan*. Islamabad: National Institute of Historical and Cultural Research.

Herbers, H. and G. Stöber
1995 Bergbäuerliche Viehhaltung in Yasin (Northern Areas, Pakistan): Organisatorische und Rechtliche Aspekte der Hochweidenutzung. *Petermans Geographicsche Mitteilungen* 139: 87－

104.
Hussam-ul-Mulk, S.
1974 Chitral Folklore. In Jettmar, K. (ed.), *Cultures of the Hindukush* (pp.95－115). Wiesbaden: Ranz Steiner Verlag.
Langendijk, M. A. M.
1991 *The Utilization of Pasture Resources in Central Ishkoman*. Giligt: Aga Khan Rural Support Programme.
Hunzai, F. A. I.
1991 *Shumali Ilaqa Jat men Ismaili Dawat: Ek Tarikhi Jaiza*. Karachi: Shia Imami Ismaili Tariqa and Religious Education Board barae Pakistan.
Lorimer, D. L.
1929 The Supernatural in the Popular Belief of the Gilgit Region. Journal of the Royal Asiatic Society for Great Britain and Ireland: 507－536.
Müller-Stellrecht
1973 *Materialien zur Ethnographie von Dardistan (Pakistan): Aus den nachgelassenen Aufzeichnungen v. D. L. R. Lorimer. Teil I Hunza*. Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.
Nejima, S.
2006 From Social Development to Religious Knowledge: Transformation of the Ismailis in Northern Pakistan. In Dudoigon, A. et al (eds.). *Intellectuals in the Modern Islamic World* (pp.226－240). London: Routledge.
NgCheong-Lum
2000 *Maldives*. New York: Marshall Cavendish.
子島進
1994a「冬のピンガル村１」『パーキスターン』136号８－13頁。
1994b「冬のピンガル村２」『パーキスターン』137号８－14頁。
1995a「冬のピンガル村３」『パーキスターン』142号17－22頁。
1995b「冬のピンガル村４」『パーキスターン』143号８－14頁。
2000「山と氷河と赤いカエル－カラーコラム山地農民の自然観」松井健編著『自然観の人類学』247－287頁，榕樹書林。
2002『イスラームと開発－カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容』ナカニシヤ出版。
2003「グローバル時代のマイノリティ―イスマーイール派開発NGO」小松久男・小杉泰編著『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会，195－214頁。
2008a「ヌールバフシー派」金基淑編『世界の先住民族　第３巻南アジア』明石書店，229－241頁。
2008b「モルディブにおけるイスラームの伝統的秩序規範の変容調査」『アジア文化研究所年報』第42号，214－219頁。
ショーンバーグ，R. C. F.
1976『異教徒と氷河』白水社。
竹原新
2010「イランのこぶとりじいさんとその背景」井本英一編『東西交渉とイラン文化』勉誠出版，96－109頁。